

# 2部

フィールド フィールド  
現場から現場へ

---

皆様、こんにちは。大学を卒業して1年になります。振り返ると、よく頑張ったなと思います。私は、卒業までに10年という月日を要しました。長い道のりでしたが、よい経験ができたと考えております。そのお話をしていきたいと思います。

## 現場から学びへ、そして現場へ

私は、看護師として小児科で働いていました。私が仕事で大切にしていることは、患者様やその家族の心に寄り添っていくことです。しかし、ある家族の思いを子どもが亡くなった後で知りました。今まで、何を見てきたのだろうかかと愕然としました。私には何が足りないのかと考え、心理学を学ぶことにしました。

心理学を勉強したからといって、人の心はわかりません。しかし、この人の今の状況にはどのようなことが影響をしているのだろうか、多角的に考えるようになりました。私は、心理学を勉強することで“なぜ”と考えるようになったこと、その考えることがその人に寄り添うことに繋がっていると思います。

講義の中で印象に残っていることがあります。それは、「子どもは常に成長する」です。その速度は、個人差はあるが成長するとありました。現場で会う子どもたちは、今までにない表情や動きを見せたりします。その成長を感じるとき、障害だから、病気だからとあきらめてはいけないと思います。あきらめずに働きかけること、そして必ず成長する、していると考えることは大切なことではないでしょうか。そのような思いをもっ

て、仕事に取り組んでできました。私は、この言葉を自分自身にも当てはめて考えています。「私も必ず成長できる」と。

## 長い道のりを経て

---

私は、入学前から病気を持っていました。年1回は、体調が不安定になり勉強できませんでした。そのうち、なぜ勉強しているのだろう、もう止めようかなという思いが生まれたこともあります。その中で、この『With』が届きます。この本を見ると、もう少し頑張ってみようかなと思えました。この『With』には、いろいろな情報が載っています。ある時、心理学学会のお知らせがありました。臨床心理士という道も考えていたので、参加しました。シンポジウムや研究を聞く中で、心理士ではなく看護師という仕事がしたいのだと再確認しました。この『With』や通信教育部のホームページでは、様々な情報を発信していますので、皆様も参考にしてみてください。

再確認をした私は、少しずつ勉強をしました。学習した知識が、現場とつながると楽しかったです。学びの集大成として、卒業研究にも取り組みました。最後のアンケート調査を終えたところで、新たに病気が発覚しました。この時、大学院への進学を視野に入れていたので本当に涙が出ました。先生や通信教育部の方と相談し、卒業研究は一時中断の決断をしました。先生や通信教育部の方は、卒業研究の再開を待っていてくださいました。そのお陰で、病気を克服して卒業研究を再開する、大学院にも行くという目標をもって治療を進めることができました。この目標がなかったら、どのように病気を克服していたのだろうと思います。支えてくださった皆様に、本当に感謝しております。

## 卒業研究

---

大学で学んだことを形にする方法として、卒業研究を選択しました。現場で疑問に思っていたことを参考にして、テーマを決めました。ひとつ調べると不明な点がさらに出てきて終わりがなく、難しいものでした。しかし、その過程は知識を深める良い機会となります。卒業研究を再開し、大学院進学のため試験を受けました。合格通知が来た時は嬉しく、論文を書き上げる目標となりました。完成した卒業研究は未熟ではありますが、10年頑張った証だと思っています。この場をお借りし、アンケートにご協力いただきました皆様に感謝いたします。

卒業後、先生の勧めで卒業研究を学会で発表する機会をいただきました。私の研究に興味を持ってくださった方に説明をして、意見交換をさせていただきました。緊張して上手く話せませんでした。本当に貴重な体験をさせていただきました。学会は京都で行われたので、観光も兼ねて楽しむことができました。

## 私の道

---

なぜ10年も学習を続けられたか。それは、子どもやその家族に寄り添っていきたくらいという変わらぬ思いがあったからだと思います。皆様にも、そのような思いがあるのではないのでしょうか。思いは、変わることもあります。それは、より良い自分へと導くために必要なことですから、悪いことではありません。ご自分の気持ちを、大事にさせていただきたいと思えます。

現在、私は大学院で学ぶ機会を得て、この仙台市に住んでいます。48歳という年齢であるため、いろいろ悩みました。しかし、後悔はしなくなかったので退職して学生になりました。物覚えも悪いので大変さはありま

すが、学べることは幸せです。私は病気もあるため、大学院でもゆっくりとした速度でしか進めません。周囲の方と同じようにと思いましたが、やはりできませんでした。私には、私の道があるのだと思います。一步一步着実に進む、これが“私”です。

## 最後に

---

学習は、簡単ではありません。しかし、知らないことを知る楽しさがあると思います。大学や大学院は、「学びたい」「知りたい」その意志を受け入れてくれる場所だと考えます。先生や通信教育部の方に、どんどん相談してみてください。答えてくださいますよ。

卒業証書を受け取るとき、私がそうであったように苦労も笑顔で思い起こせるでしょう。皆様の大学生活が、実り多きものとなりますように祈っております。

## スクーリング・アンケートより(1)

アンケートより、スクーリングの感想を抜粋しました。

### ●地域福祉論 都築 光一

- ・社会福祉協議会の地域福祉にとっての役割がよくわかった。地域福祉の計画や活動を行っていく方法なども理解することができた。
- ・先生の実体験や事例を交えての講義であり分かりやすかった。地域福祉といえば、行政やサービス提供側が資源の開発をしていくのではなく、地域に住んでいる住民などが主体となり、専門職が相互に協力しあっていくことが大切と感じた。

### ●社会保障論 阿部 裕二

- ・社会保障に関する法や制度について、私の専門とする介護保険制度以外で、気付かなかった点、知らなかった点がたくさんあり、日常的にも役立つ制度を多く教えていただいたことで、ますます興味深く、関心のもてるスクーリングでした。

### ●障害者福祉論 横山 英史

- ・優生思想についてグループディスカッションをしたことが、とても刺激になりました。自分の意見を口に出して言うことはとても勇気がいるますが、自己理解にもつながりました。
- ・障がいがある人のもつパワーがとんでもなくすごくて、かっこよくて感動しました。もっと深く関わっていきたいと思いました。そして多くの人に知ってほしいと思いました。先生が障がいについての生の声をたくさん教えてくれたので、非常に興味深く貴重でした。

### ●児童(・家庭)福祉論 千葉 伸彦

- ・長く福祉専門職として高齢者の分野で相談援助を行ってきましたが、児童や家庭への福祉にかかわっていないことで自分のフィールドワークはまだ狭い範囲であることを認識できました。ただ、分野を問わず、共通する尊厳を認め支えること、権利を守りその行使を援助すること、の意義を改めて確認する機会になりました。どの分野にも言えることですが、内省することで専門性は高まると思いました。
- ・子どもの最善の利益について、虐待、障害児など様々な角度からビデオを使い興味をもてるように効果的に講義が組まれており、講師の体験から説得力も感じられる内容でした。